

生徒自身が考え、他の生徒と話し合うことで理解が深まる

発表の中で多かったのは歩きスマホに関するもの。ある生徒は「今の私たちにとって歩きスマホの問題が現実的。まわりで迷惑がかかる、まわりから見ても不快という点からまわりの人のことを考えて行動したい。一人ひとりが行動すれば、だんだんと広がっていくと思うので、正しい行動を自分からしていきたい」と発表。歩きスマホを防ぐ方策として「歩いている時は電源をオフにする、手の届きにくいところにしまう」「冬場はスマホの操作ができない手袋をあえてすることで、歩きスマホをする人が少なくなるのではないか」という提案があった。4回の授業を終えた生徒に感想を聞くと、「歩きスマホは

高齢の方や障がいのある方に対して危険であることに気がつきました。自分の行動が周囲の人々に対して、どのように映っているか、自分のことだけに集中して行動していたら、まわりから迷惑と思われてしまいます。まわりを危険に巻き込んだり、自分も危険なことに巻き込まれる、そうしたことを意識して、しっかり行動したいと思いました」（中1大河内さん）、「交通事故は人が原因で起きていることを知って、自分にもその可能性があるという認識が生まれ、交通事故に対する危機感が以前より高まりました。見通しの悪い曲がり角では『自分がここで確認せずに飛び出したら、どうなるんだろう』と予測するようになりました。安全確認という行動も大切なのですが、意識も大切だと思います」（中1金澤さん）と答えてくれた。同校の交通安全教育に協力した大谷さんは、継続的に4回

実施したことに意義があると評価する。「生徒自身が考え、生徒同士で議論することによって交通安全への理解が深まり、行動変容を促す良いきっかけになったのではないのでしょうか。今回の授業の効果を検証したいと考えています。生徒の皆さんが気づいたことを日常生活の中で定着させる指導も今後、必要になると思います」。京さんは「プログラムの映像教材は主人公が中学生ということもあり、生徒は『自分も思い当たる節がある』と感情移入しやすく、様々なことに気づくことができました。Hondaのプログラムを私なりにアレンジすることで、教育現場に求められている『主体的・対話的で深い学び』を実現できたと思います」と、今年度は中学3年生の社会（公民的分野）の「交通」を題材にする授業の中でもHondaのプログラムを活用する予定だという。

Close Up

クローズアップ 教育手法

学校の放送室から教室のモニターへ 非接触型の交通安全教室を推進

（一財）長野県交通安全教育支援センターは県民の交通安全意識の向上を図ることを目的に幼児とその保護者、小・中・高校生、高齢者へ無償で出前型交通安全教育活動を推進してきた。コロナ禍に対応するため、同センターは学校の放送室を活用した非接触型の交通安全教室を昨年の秋から実施している。

同センター事業部主任 宮澤まゆみさんは「昨年の春は学校が休校になってしまったこともあり、恒例となっていた春の交通安全教室はすべてキャンセルとなりました。秋から徐々に再開したものの、ソーシャルディスタンスの確保などを考慮すると、コロナ禍以前のやり方で行うのは無理だとわかりました。そんな時、ある小学校の先生からZoomを活用してできないかという相談を受けたのです。これが非接触型の交通安全教室を始める第一歩でした」と振り返る。この時は小学校の空いている教室で交通安全指導を行い、ノートパソコンを通じてその様子を児童がいる各教室のモニターに映し出し実施した。この経験をもとに放送室を活用することにしたそうだ。

学校には必ず放送室があり、撮影や配信のための機材を備えたスタジオが併設されている学校も少なくない。そこで、放送室から各教室のモニターに指導を配信するという形を基本としたのである。

「これまで対面による指導にこだわってきたので、子どもたちの表情を読み取りながら進められないことには不安がありました。それでも受講してもらったほうがいいと、この手法を推進していくことにしたのです。指導の映像を見せるだけでは、既製のビデオと変わらないので、途中で私たちから問いかけをしたり、子どもたちに身体を動かしてもらったりする要素も盛り込むように工夫しています」。

5月21日、同センター指導員の松本綾子さんと酒井美弥さんが松本市立開智小学校で交通安全教室を実施した。まず、1、2年生（194名）を対象に歩行教育から始まる。ここではHondaの交通安全教育プログラム「あやとりひよこ※1」を活用。交通場面が描かれた大型のワークシートを使って、道路の歩く場所や歩行者用信号機の色の意味を放送室のスタジオから説明。その様子を児童は各クラスの教室にあるモニターで視聴した。途中、「右側はどちらですか？右手を上げてみましょう」と指導員が画面を通して呼びかけると、教室の児童は右手を上げて反応。最後は指導員が手を上げて右、左、右を確認する動作に合わせて、児童もそれを実践した。

1、2年生が終わると、次は3～6年生（402名）を対象とした自転車教育。ここではHondaの「小学生 自転車の交通安全※2」を活用。指導員のノートパソコンに表示している映像資料（スライド）を教室のモニターに映しながら、

自転車の点検や正しい構え（乗車姿勢）、自転車が走るべき場所について解説していく。指導員はモニターに狭い歩道を通る自転車の前にベビーカーを押している人がいるイラストを表示させ、「このような時、皆さんはどのようにしますか？クラスで意見を出し合ってください」と1分間、児童に考えてもらう。そして、正しい対応のイラストを映し、「自転車から降りて押して歩く、止まって待つなど、歩く人の迷惑にならないようにします」と説明した。

児童が受講する様子を見守った同校校長 玉水智香子さんは「モニターを通しての交通安全教室でしたが、指導員の方から問いかけなどがあり、子どもたちは目の前で行われている感覚で参加できたと思います。ここで子どもたちが身につけた知識を実際の道路で実践できるよう今後、私たちがフォローしていきたいと考えています」と感想を語った。「学校によって設備や要望は様々なので、私たちも1回1回が勉強で試行錯誤を重ねているところです。交通安全教室の中止を検討している学校に対して、非接触型の手法を提案することで開催につなげたいと考えています。コロナ禍が終息して、対面での交通安全教室をすることが一番の願いです」と宮澤さんはいう。

※1 4～5歳児を対象として歩くことに焦点を当て、「どこを歩くのか」「どのように歩くのか」を考えてもらいながら交通安全の基本を学ぶことができる交通安全教育プログラム。詳細は以下のホームページ参照。
<https://www.honda.co.jp/safetyinfo/kyt/ayatorii/>

※2 小学生に自転車のルールや知識と安全な乗り方を身につけてもらうことを目的とした交通安全教育プログラム。DVDに映像資料と指導マニュアルが収録されている。詳細は以下のホームページ参照。
https://www.honda.co.jp/safetyinfo/teaching_materials/bicycle/



1、2年生には「あやとりひよこ」を活用。放送室のスタジオの様子が各教室のモニターに映し出される



児童は映像を見るだけでなく、指導員の呼びかけに合わせて答えたり、身体を動かす



昨年、長野県内で発生した小学生の交通事故データを見せながら、歩行中の事故は1、2年生が多いことを伝える



3～6年生には「小学生 自転車の交通安全」を活用。指導員のノートパソコンに表示している映像資料を教室のモニターで児童に見てもら



速いスピードで走っている時は左ブレーキで速度を落とし、最後に右ブレーキをやさしくかけるという安全なブレーキのかけ方を練習



自転車用ヘルメットの効果を示す実験。風船は硬いものに叩きつくと割れてしまうが、ヘルメットで保護すれば叩きつけても割れない